変わる日本の「暮らし」と「まち」

多摩ニュータウン魅力実感イベント

多摩ニュータウンで遊ぼう、暮らそう、公園や遊歩道が僕らのLDK
（2015年●平成27年～）

阿部民子 text by Tamiko Abe

illustration：Shigeyuki Sakata

広大な多摩丘陵を切り拓いてつくられた多摩ニュータウン。都心から約30分というアクセスにありながら、昭和40年代に計画されたゆとりある空間と、時間をかけて育った豊かな自然に恵まれた、日本最大級のニュータウンだ。

そのまち並みや環境を、実際に歩いて体験してもらおう、というスタンプラリー、題して「多摩ニュータウン魅力実感イベント」が、11月10日(土)に開かれた。京王線「京王永山」駅でマップを受け取った参加者は、まず歩いてすぐの永山北公園で1つめのスタンプをゲット。木々に囲まれた公園では、大小、形もさまざまなテントで遊んだり、地元で人気のパン屋さんのパンを買ったり。どんぐりを拾ったり、公園を走り回って遊ぶ親子連れも楽しそうだ。

赤や黄色に染まり始めた木々に囲まれた遊歩道をゆっくりと歩いていくと、軽食や飲み物を満載した「京王ほっとネットワーク」の移動販売車のある第二スポットに行きつく。車道と立体交差する橋を渡ると、広々とした芝生が広がる。終点の永山南公園だ。公園には東京ヴェルディのサッカー教室や、東京八王子ビートレインズのフリースローゲーム、プチ木工教室、ヤマトグループの青空ヨガ教室などの楽しい催しもいろいろ。すべて回ると参加賞などがもらえ、多摩市内外から300人以上がラリーに参加。秋の一日を楽しんだ。

広々とした公園が住民や訪れる人にとって居心地のいいLDKと化した一日だった。

手づくりイベントで魅力発信

このイベントを企画したのは、行政である多摩市と、電車を乗り入れる京王電鉄、そしてURだ。

三者は「まちの活性化」をテーマに開かれた「多摩市ニュータウン再生推進会議」をきっかけに、「多摩市の魅力を1人でも多くの人に知ってもらいたい」という共通の思いを確認。公民の壁をとりはらい、4年前から1か月に1回ほどミーティングを重ね、どうやったら多摩市の魅力を伝えられるのか、話し合いを重ね様々な取り組みを行ってきた。多摩市の公園面積が11・17％と都内トップというところに着目。豊かな公園と遊歩道があるニュータウンに目を向けたのである。そして、今回のイベントで実際に歩いてみて気づくのが、遊歩道の快適さだ。永山駅から永山南公園まで楽しみながら歩いて20分。まったく車に遭遇せず、森林浴気分でウォーキングできる。聞くと、多摩市内の遊歩道は、全長約42キロメートル。車がそれほど普及していない約50年前に、歩車分離で計画されたという先見性にも、驚かされる。

多摩市企画政策部の永井陽介さんは、「多摩市は、面積の約6割をニュータウンが占め、多摩市の良さを知るために、ニュータウンの良さを体感してもらいたい。それには、実際に公園や遊歩道を歩き、住まいと公園、交通網という、生活に関わるところを体験してもらおう、と市と京王電鉄、URの三者で、昨年からスタンプラリーを始めました」と話す。

イベントの実現に向かって、多摩市は行政のネットワークを生かして企業等にイベントへの参加の呼びかけを行うほか、ポスター制作などで幅広く宣伝。京王電鉄は、駅貼りや車内吊りでの宣伝を行い、URは「住む」イメージがしやすいように部屋の内覧や、社内の若手からなるO－LDK部によるイベント企画を持ち込み運営。イベント前は週1回の頻度で話しあいを重ね、それぞれが得意分野で出来ることを行い、知恵を振り絞り準備を進めてきた。

京王電鉄の二井有紀子さんは「私が所属する沿線価値創造部は、沿線を盛り上げ、住みやすい沿線にするのが課題。三者が垣根を越えて協力することでニュータウン再生への相乗効果が生まれれば」と語る。

UR多摩エリア経営部の宮坂和江は「このイベントや活動で新しく住む方が増えるのも希望ですが、長く住んでくださっている方々にも多摩の魅力を再認識していただけるといいですね」と、三者連携の目的を説明する。

子育て層にもアピール

今回、18の団体が参加、30もの魅力的なコンテンツが並んだ。そのなかで、「たき火de焼き芋」や災害時での子どもたちの遊び方を教える「もしものときの外遊び」、ハンモック体験などを行っていたのは「O－LDK部」だ。部員を率いる林雄太は「団地の屋外空間の魅力を知ってもらいたいと5年前から始めました。休日の活動ですが、普段は触れ合う機会が少ない居住者の方と実際にお話しできるのもいいなと思っています」と語る。

無料で配った焼き芋も大人気で、4歳の女の子と一緒に食べていたお母さんは「この団地に住んでいますが、同世代のお友達も多いし、横断歩道を渡らないで公園に行けるのも安心で、子育てにはすごくいい環境です」と笑顔で話してくれた。

URはまた、無印良品とコラボしてリノベーションした「MUJI×UR」のモデルルーム見学ツアーも実施。参加者からは「明るくて、風通しがいい」「しっくいの様に見える壁や木の柱、レトロな型押しガラスを残しているのが、オシャレ」などの声があがった。

京王電鉄が多摩センターにサテライトオフィスをつくり、職住近接を提案するなど、新しい動きも始まっている。URの宮坂は「こうした動きが、定住促進やニュータウンの活性化にもつながればうれしい」と話す。

「多摩市は次年度から、子どもの医療費助成の所得制限撤廃を始め、子育てしやすいまちづくりに力を入れています。イベントを通して、そうした層にもアピールできれば」と、多摩市の永井さん。三者の強力なタッグは、多摩市、そして多摩ニュータウンに新しい風を起こしている。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社